小學校用

土佐史要

上

特31
359

026116−001−4

特31−359

土佐史要（小学校用）

青木　義正／編

和1冊（上26丁）
M26

ADC−3774

特31
359

青木義正著述

支那史要

版權所有

教育書房合梓

小學校用

土佐史要卷之上

青木義正 編纂

第一章 上古ヨリ細川氏守護ノ時マデ

我ガ土佐ハ南海ノ島國ナレバ、古ヨリ上國トノ交通自ラ稀ニ、事歴ノ正史ニ見ルベキ者甚ダ少キヲ以テ上古ノ事茫漠トシテ知リ易カラズ。紀元六百年ノ頃（崇神帝ノ時）天韓襲命（アマノカラソノミコト）ヲ以テ土佐國波多（ハタ）

上古國造國司

ノ國造トナシ、後凡二百年（成務帝ノ時）小立足尼（ヲダテノソコネ）ヲ以テ土佐ノ國造ニ任セシコト、始メテ正史ニ見ユ。紀元千三百八十年ノ頃（元正帝ノ時）ニハ、伊豫ノ國主高安（タカヤス）

王ニ阿波、讃岐及ビ土佐ノ三國ヲ支配セシム。其後國司守護ノ交替ニ至テハ、一々擧クルニ勝ヘス。

白鳳ノ地震

紀元千三百三十年ノ頃天武帝ノ白鳳年間全國大地震アリ、時ニ土佐南部ノ土地五十餘萬頃、沈ミテ海トナリ、人畜死スル者數ヲ知ラズ。是レ卽チ世ニ傳フル所ノ黑田郡沈没ノ時ナリ。

流罪ノ遠近ヲ定ム

紀元千三百八十年ノ頃、聖武帝罪人配流ノ遠近ヲ定メ給ヒ、隱岐、佐渡、常陸、安房等ノ諸國ト共ニ、土佐ヲ以テ遠國ノ部トナセリ。上世ヨリ土佐ハ罪人ノ配所ニシテ、皇族朝官ノ流サル、者頗ル多ク、其他通常囚徒ノ放逐ニ至テハ、勝テ算フベカラズ。

池田王、大伴古慈斐、紀夏井、橘繁延、藤原師長等ハ配流者ノ主ナル者ナリ、

聖武帝僧行基ニ、長岡郡五臺山村竹林寺、幡多郡平田村延光寺等ヲ開カシメ、國分寺ヲ立テ、悲田施藥ノ二院ヲ設ケ給ヒシカバ、是ヨリ佛法南海ニ起ル。後紀元千四百七十年ノ頃平城嵯峨二朝ノ間僧空海又安藝郡室戸村最御崎寺、元村金剛頂寺、高岡郡龍村青龍寺、幡多郡蹉跎山金剛福寺等ヲ立テシ

佛法南海ニ起ル

カバ、佛法是ニ至テ最モ盛ナリ。

空海官符ヲ請テ、土、豫、阿讃ノ四國ニ勸進シ、金剛頂寺ニ乞食ヲ留ム、是レ四國遍路ノ始メナリト云フ、

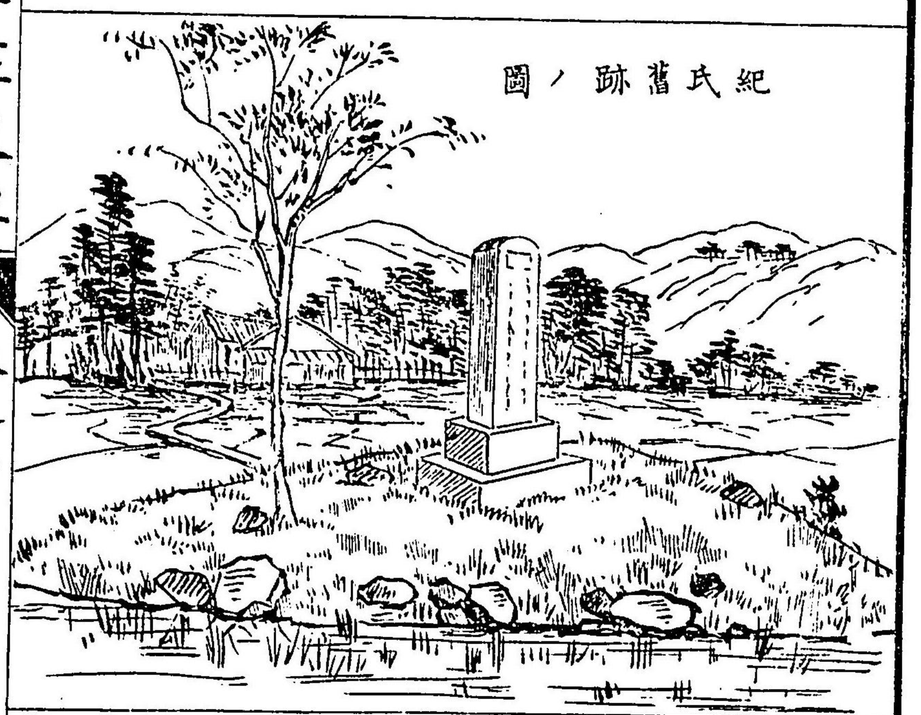
紀元千五百一年仁明帝ノ承和八年吾川郡ヲ分テ高岡郡ヲ置ク。上古土佐ハ安藝、長岡、吾川、幡多ノ四郡ナリシヲ、是ヨリ先、已ニ安藝郡ヲ分テ香美郡ヲ置キ、後又長岡郡ヲ分テ土佐郡ヲ置キシガ、是ニ至リ遂ニ増シテ今ノ七郡トナレリ。

吾川郡ヲ割テ高岡郡ヲ置ク

紀元千五百九十年醍醐帝ノ延長八年從五位上大内記御書所預紀貫之土佐守トナリ、後四年任滿テ京ニ還ル。貫之ハ孝元帝ノ裔、紀望之カ子ニシテ和歌ニ

紀貫之

紀氏舊跡ノ圖



妙ナリ。著ハス所ノ土佐日記ハ、其歸途ノ日誌ニシテ、文章優雅、國文ノ模範タルノミナラズ、兼テ又土佐當時ノ風俗地理等ヲ知ルノ便アリ。

當時國府ノ遺跡ハ長岡郡比江村ニアリ、俗ニ内裏畔ト稱ス、此邊大ナル礎石アリ、又古瓦ノ破片ヲ堀出ス、

源希義

紀元千八百四十二年（安徳帝ノ壽永元年）平家ノ家臣蓮池權（バスイケゴンノ）守家（カミイヘ）綱（ツナ）、平田太郎俊遠（ヒラタタラウトシトホ）等、源希義（ミナモトマレヨシ）ヲ年越山（トシゴエヤマ）ニ殺ス。希義ハ義朝ノ四男ニシテ頼朝ノ同母弟ナリ、初メ平家ノ為メ土佐ニ流サレ、長岡郡介良ニ居リ土佐冠者ト稱ス。頼朝軍ヲ東國ニ起スニ及ビ、家綱俊遠等、希義ノ之ニ應センコトヲ疑ヒ、兵ヲ率ヰテ介良ヲ攻ム。希義夜須ニ往テ夜須七郎行宗ニ依ラントト欲シ、走テ年越山（長岡郡坂折山）ニ至ル、家綱等追ヒ擊テ之ヲ殺ス。此時行宗モ亦希義ヲ救ハントシテ、馳セテ野宮（ノミヤ）（香美郡深淵）ニ來リ、變ヲ聞テ途ヨリ

還ル。家綱等又行宗ヲ追掛ケ夜須ニ至ル、行宗一族ヲ率ヰ、佛ケ崎（ホトケガサキ）（今ノ手結崎）ヨリ船ニ乘テ紀伊ニ逃ル。後頼朝伊豆有綱ニ命シテ、家綱俊遠等ヲ討チ滅ボシ、行宗ヲシテ香美長岡二郡ヲ領セシム。初メ希義ノ殺サルヽ時、僧琳猷（リンユウ）屍ヲ收メテ厚ク之ヲ葬リ、遺髮ヲ取テ鎌倉ニ至ル。頼朝大ニ喜ビ留リテ大寺ノ別當トナランコトヲ勸ム。琳猷辭シテ土佐ニ歸リ、介良ニ住シテ希義ノ菩提ヲ吊ヒ、以テ身ヲ終フト云フ。

希義ノ墳墓ハ現ニ長岡郡介良山ニアリ、

土御門上皇

紀元千八百八十一年（順德帝ノ承久三年）北條義時、土御門（ツチミカド）上皇ヲ土佐國幡多ニ遷シ奉ル、少將定平、侍從貞元等之ニ隨フ。然ルニ土佐ハ土地餘リニ遠キ故ヲ以テ、一年ノ後阿波ニ移リ給フ。香美郡岸本村月見山ハ、上皇ノ月ヲ賞シ給ヒシ遺跡ナリト云フ。

（阿波ニ移リ給フノ途、野根山ニ於テ大雪ニ遇フ、岩佐ノ清水ハ、此時上皇駐輦ノ遺跡ナリト云フ、）

尊良親王

紀元千九百九十二年（後醍醐帝ノ元弘二年）後醍醐（ゴダイゴ）帝第一ノ皇子中務卿尊良親王（ナカツカサキヤウタカナガシンワウ）、北條氏ノ爲メニ土佐國幡多ニ遷サレ給フ、中將爲明之ニ隨フ、佐々木太夫判官時信等兵ヲ率ヰテ護送シ、有井庄司カ館ノ傍ニ一室ヲ建テヽ居給フ。（有井庄司ノ邸跡ハ白田川村米原ニアリ）時ニ御息（ミヤス）所（ドコロ）京都ニ在リシカハ、親王隨身秦武文（ハタノタケフミ）ニ衣一領ヲ與ヘ、潛カニ行テ之ヲ迎ヘシム。武文御息所ヲ具シテ、歸途攝津ノ尼ヶ崎ニ來ル、筑紫ノ海賊松浦五郎ト云フ者、謀テ之ヲ奪ヒシカバ、武文大ニ驚テ之ヲ追フニ及ハズ、因テ天ヲ睨テ自殺ス。松浦ノ舩、阿波ノ鳴門ヲ過クル時、暴風起リテ殆ド覆ラントス、松浦怖レテ海神ノ祟リトナシ、衣ヲ海中ニ投ス、風浪益々荒ラシ、遂ニ御息所ヲ淡路ニ置テ去ル。適マ親王警護ノ兵京都ヨリ來ル者、

衣ノ袖ヲ海上ニ拾テ、之ヲ親王ニ奉リシカハ、親王見テ大ニ悲ミ、御息所既ニ死セリトナス。後楠正成等北條氏ヲ滅スニ及テ、親王京都ニ還リ給フ。

後足利尊氏反シテ、官軍屢々利アラサルニ及ヒ、延元三年新田義顯ト共ニ、越前ノ金ヶ崎城ニ自裁シ給フ、

後四年延元元年足利尊氏反シテ、四國ノ兵、大半細川氏ニ應スルノ時ニ當リ、長宗我部、津野、大平等國中ノ諸族亦細川氏ニ屬ス。官軍河間光綱、大高坂松王丸、遠江房等大高坂城ニ據リ、之ヲ防テ屢バ克タス。後賊軍又大高坂城ヲ攻メシ時、新田綿打入道、有井又三郎等、城ノ後詰トシテ潮江山ニ陣シ、賊ト戰テ又敗レ、大高坂城遂ニ陷ル。尊氏乃チ松王丸、遠江房等カ領地ヲ以テ堅田國貞ニ與フ。是ヨリ南海復タ官軍ナク、全國悉ク足利氏ニ屬ス。細川頼之四國ノ管領トナルニ及テ、其一族頼益以下、四世相繼テ土佐ノ守護トナリ、香美郡田村ニ居ル。

細川氏守護

當時細川氏治所ノ跡ハ上田村細勝寺近傍ナリト云フ、

以上凡二千餘年間ノ事歴ニ於テ、最モ眼ヲ注クベキ者ハ、罪人配流ノ一事ナルベシ。都ヨリ來レ

ル是等ノ流人ハ、自然上國ノ開明ヲ土佐ニ導クノ媒トナリ、殊ニ人情風俗言語等ノ上ニ、容易ナラサル差響ヲ及ボシタルコトヲ忘ルベカラズ。

次ハ佛法ナリ、紀元千三四百年ノ頃ニハ國分寺モ立チ、行基空海ノ名僧、東西ノ深山ニ分ケ入テ、地ヲ開キ寺院ヲ立テタルヲ以テ、爲メニ人心ヲ改良シタルノミナラズ、國内往來ノ便モ亦大ニ開ケタリ。彼ノ有名ナル槙ノ山鄕蔓橋ノ如キモ、亦行基ノ造リシ所ナリト云フ。

紀元千九百年ノ頃、甲冑、弓箭、紙、獸角、魚類等ヲ貢セシコト延喜式ニ見ユ。去レバ此時工藝漁獵等ノ業モ、既ニ著シク進歩シタルコトヲ知ルニ足ル可シ。

第二章 七族時代ヨリ長宗我部氏國内ヲ定ムルマデ

足利氏ノ中頃（紀元二千百年ノ頃）ヨリ、土佐ハ漸ク部落割據ノ世トナリ行キ、細川氏守護タリシト雖モ、命令國中ニ行ハレズ、豪族各々一城ヲ搆ヘテ、四方ニ分立スル者枚擧ニ勝ヘス。甚シキハ一鄕一村ノ内スラ、尚ホ四分五裂シ、戈ヲ執テ相爭フニ至ル。

七族割據

其内最モ強キ者ヲ擧クレバ、長宗我部氏岡豐ニ居リ、本山氏本山ニ居リ、安藝氏安藝ニ居リ、山田氏山田ニ居リ、吉良氏弘岡ニ居リ、大平氏蓮池ニ居リ、津野氏羽山ニ居ル、之ヲ土佐ノ七族又ハ七守護ト云フ。

土佐一條氏

文明二年（紀元二千百二十九年）前關白一條教房（ノリフサ）其子房家（フサイヘ）ト、京都ノ亂ヲ避ケテ甲ノ浦ニ來ル。岡豐ノ城主長宗我部文兼（フミカネ）、諸城主ト議リ、迎ヘテ岡豐ニ居ラシメ、仰テ國司トナス。後一年ニシテ幡多郡中村ニ移リ、中村御所ト云フ。幡多ハ是ヨリ先、世々一條氏ノ所領タリシヲ以テナリ、土佐一條氏是ヨリ始マル。

永正二年（紀元二千百六十五年）本山、山田、大平、吉良等兵ヲ合

本山等大ニ長宗我部氏ヲ破ル

セテ、長宗我部兼序（カネツグ）文兼ノ孫ニシテ元親ノ祖父ナリヲ岡豐ニ討テ大ニ之ヲ破ル、兼序辛フシテ身ヲ逃レ、槙ノ山郷ニ走テ専當（センタウ）氏ニ依ル。後三年出デ、香美郡吉原ノ城ニ居ル、山田等又之ヲ攻ノ落トセシカハ、兼序遂ニ自殺ス。家臣近藤某、長子千王丸（センワウマル）ヲ皮籠ニ入レ、負テ幡多ニ走ル、千王時ニ年五歳、後名ヲ國親ト改メ、一條氏ノ扱ヒニ因テ本山等ト和睦シ、岡豐ノ舊城ニ歸ルコトヲ得タリ。

長宗我部氏其先ハ秦始皇帝ノ裔、應神帝ノ時日本ニ歸化セシ者、子孫姓ヲ波多ト賜フ、秦河勝ト云フ者廐戸皇子ニ屬シ、物部守屋ヲ討テ功アリ、後數十世ヲ經テ能俊ニ至リ、始メテ土佐ニ來テ長岡郡岡豐ニ居リ、宗我部氏ト稱ス、然ルニ此時香美郡ニモ亦宗我部氏アリ、故ヲ以テ更ニ改メテ長宗我部氏ト稱シ、香美郡ニアル者香宗我部氏ト稱ス、是ヨリ十六世文兼ニ至テ勢稍々大ナリ、

津野氏一條氏ニ降ル

永正十四年、羽山ノ城主津野元實、手勢ヲ率ヰテ福井玄蕃（ゲンバ）ヲ戸波（ヘハ）ノ城ニ攻ム。一條氏之ヲ聞キ、兵ヲ遣テ玄蕃ヲ援ケ、散々ニ津野ノ軍ヲ破ル。元實戰死シ、兵卒等惠良沼（エラヌマ）ノ中ニ陷テ、死スル者數ヲ知ラズ。一條氏ノ大軍雲霞ノ如ク羽山ノ本城ニ迫ル、家臣中平兵庫等固ク守テ下ラス、其後一條氏ト戰フコト數年ニ及ヒ、力屈シテ遂ニ降ル。次テ一條氏又蓮池ノ城主大平山城守ヲ滅ス。

大平氏亡ブ

津野氏ハ藤原仲平ノ後ニシテ、世々高岡郡羽山ニ住ス、文明ノ頃之高アリ、大津ノ城主天竺孫八郎ヲ滅シテ武威遠近ニ震フ、數世ヲ經テ元實ニ至リ、北津野山ヨリ南須崎野見ノ間ヲ領シテ、國中ノ豪族タリ、元實ノ墓ハ今高岡郡下分村元亨院境内ニアリト云フ

大平氏ハ蓮池家綱ノ後ニシテ、亦國中ノ名族ナリ、世々高岡郡蓮池ニ居リ、東高岡ヨリ西佐川越知ニ至ルノ數邑ヲ領セリ、

山田氏亡ブ

天文十二年（紀元二千二百三年）長宗我部國親、山田ノ城主山田治部少輔元義ヲ滅ス。初メ元義放縱ニシテ頗ル猿樂ヲ好ム、家臣西内常陸、山田監物（ケンモツ）等屢バ之ヲ諫ムレドモ少シモ聽カズ。國親乃チ謀ヲ設ケテ、先ツ常陸ヲ殺サシメ、不意ニ元義ヲ襲テ大ニ之ヲ破ル。山田監物等戰死シ、元義出テ降ル。國親之ヲ韮生郷久保ニ置キシガ、後幾バクモナクシテ死セリ。

山田氏本姓ハ大中臣氏、大中臣能宣ノ後ナリト云フ、世々山田ニ住シテ亦國中ノ豪族タリ、

國親長岡郡ノ南部ヲ徇フ

次テ國親大津、介良、布師田ノ諸城ヲ攻メ取リ、進テ下田蛸（タコ）ノ森（モリ）城ニ向ヒ、火ヲ放テ之ヲ落トス。十市栗山ノ城主細川國隆モ亦國親ニ屬セントセシガ、家老岩松七郎之ヲ諫メテ、益々備ヲ嚴ニセシム。國親乃チ池萬五郎ト云フ者ヲ誘ヒ、七郎ヲ劒尾（ツルギヲ）ニ暗殺セシム。是ニ於テ十市、池城主細川頼和ハ國隆ノ子ナリ、並ニ國親ニ降ル。次テ國親髮ヲ削テ瑞應覺世（ズイヨウカクセイ）ト

號ス。

是ヨリ先、本山茂宗既ニ土佐吾川二郡ヲ併セ、子茂辰ニ本山ヲ守ラシメ、自ラ朝倉ノ城ニ居リ、髪ヲ削テ梅慶（バイケイ）ト號ス。弘岡ノ城主吉良宣直（ノブナヲ）ハ、初メ本山方ナリシガ、後又密ニ一條氏ニ通セリ。茂宗之ヲ聞テ大ニ怒リ、宣直カ贄殿川（ニヘドガハ）ニ漁スルノ時ヲ窺ヒ、兵ヲ以テ急ニ之ヲ襲フ、宣直矢ニ中タリ、如來堂ニ自殺ス。次テ吉良城ヲ攻メ落トシ、茂辰本山ヨリ移テ之ニ居ル。

吉良氏亡ブ

本山氏元トハ八木氏、近衛帝ノ時賴則盛政ト云フアリ、始メテ長岡郡本山ヲ領ス、紀貫之ノ時八木康教アリ勢力漸ク強シ、後數十世ヲ經テ茂宗ニ至リ改メテ本山氏ト稱ス、茂宗大志アリ、屢バ兵ヲ出シテ土佐吾川ノ諸城ヲ攻メ連リニ之ヲ下ス、吉良氏ハ源希義ノ後ニシテ世々弘岡ヲ領セリ、

永禄三年（紀元二千二百十八年）國親本山茂辰ト絶ツ。是ヨリ先、一條氏兩家ノ爲メニ和ヲ媾シ、國親ノ女ヲ以テ茂辰ニ妻ハサシムト雖モ、兩家ノ心尚ホ解ケス。或時國親、舟ニテ兵粮ヲ種崎ニ送ル、潮江ノ城兵、孕ニ待チ伏セシテ之ヲ奪ヒシカバ、國親大ニ怒リ、大工福留右馬之丞カ謀ヲ用ヒ、風雨ノ夜ニ乘シテ長濱城ヲ攻メ落トス。（此時潮江長濱共ニ本山氏ニ屬セリ）茂辰聞テ爭デカ猶豫スヘキ、大軍ヲ率ヰテ長濱ニ赴

長濱ノ戰

キ、國親ト慶雲寺ノ前ニ血戰シテ互ニ勝負アリ。時ニ國親ノ嫡子彌三郎元親年十八、手勢ヲ以テ大ニ本山ノ軍ヲ戸ノ本ニ破ル、世ニ戸ノ本ノ戰ト云フハ是ナリ。既ニシテ國親病テ岡豐ニ卒ス年五十七。

元親土佐郡ヲ徇フ

此年元親宇津野越ヨリ進ミ、火ヲ放テ潮江城ヲ取ル、國澤今ノ要法寺町近傍ノ城主國澤將監大高坂ノ城主大高坂權頭モ亦風ヲ望テ出テ降ル。此時一條氏モ亦元親ト牒シ合セ、本山氏ノ虛ニ乘ジテ蓮池城ヲ回復セシカハ、近傍ノ諸城相尋テ降リ、高岡一郡再ヒ一條氏ニ歸ス、是ヨリ本山氏漸ク衰フ

元親吉田周孝、福留隼人等ヲ遣テ、土佐郡ノ諸城ヲ攻メシム。久萬城主宗岡筑前秦泉寺城主秦泉寺大和福井城主稲毛右京等皆降ル。周孝井口ノ城主井口勘解由ト舊アリ、因テ其降ランコトヲ勸ム。勘解由聽カズシテ反テ之ヲ罵ル、周孝怒リ急ニ之ヲ攻メ落トシ、勘解由ヲ殺ス。元親乃チ周孝ヲ以テ井口ノ城主トナス諸將進テ神ノ森城ヲ攻ム、城險ニシテ落チズ。隼人思フニ此山上、水アルベカラスト、因テ西ノ方芝牧山ノ汲道ヲ絶タシム、城中大ニ困ム。既ニシ

テ福井ノ降兵等、北方ノ險岨ヲ攀チ登リ、潛カニ城ニ入テ火ヲ放ツ。城兵大軍襲ヒ來ルトナシ、周章逃レ去ル。元親神ノ森ヲ以テ非有ニ與フ。（非有ハ瀧本寺ノ僧元親ノ帷幄ニ參シテ頗ル功アリ）尋テ神田（カウダ）、石立（イシタテ）等ノ諸城皆降リ、本山氏ノ保ツ所、南部ニ於テハ、唯朝倉吉良ノ二城ノミ。

（神ノ森落城ノ時、城主出雲守カ妻險ヨリ落テ死ス、後里人落神ト稱シテ之ヲ祀ル、出雲守奮戰腹ヲ割テ死ス、後人因テ腹切ノ森ト云フ、）

永禄五年元親大軍ヲ率ヰテ朝倉城ヲ攻ム、茂辰之ヲ迎ヘ、兩雄朝倉鴨目（カモメ）ノ間ニ血戰シテ、互ニ勝負

（本山氏退居）

アリ。既ニシテ本山氏ノ勢日々ニ衰ヘ、部下ノ兵多ク元親ニ屬スルヲ以テ、茂辰自ラ朝倉城ヲ焚テ本山ニ退ク。吉良ノ城將森、大窪等モ亦同時ニ城ヲ棄テ、逃レ去ル。元親乃チ弟親貞ヲ以テ吉良ノ城主トナシ、吉良左京之進ト稱セシム。

（一宮ノ兵火）

此年茂辰白岩口（シライワ）、久禮（クレ）野口ノ二道ヨリ出テ、風ニ乘シテ火ヲ一宮ノ民家ニ放ツ火延ヒテ社内ニ及ビ、堂宇大半灰燼トナル。其一軍又秦泉寺ニ亂入セシカハ、秦泉寺大和等擊テ之ヲ卻ク。次テ茂辰卒シ長子將監親茂繼ク。

安藝氏亡ブ

永禄十二年元親安藝國虎ヲ討テ之ヲ滅ス。是ヨリ先、元親已ニ中郡ヲ定メ、漸ク東郡ヲ計ラントス、先ヅ吉田重俊ヲ上夜須ノ城主トナシ、密ニ隙ヲ窺ハシム。偶マ馬上ノ城番、上夜須ノ領内ヲ掠ムルノコトアリ。是ニ於テ元親自ラ大軍ヲ率ヰテ安藝ニ向ヒ、姫倉金岡二城ヲ取リ、大ニ國虎カ軍ヲ矢流山ニ擊チ破ル、世ニ矢流崩シト云フハ是ナリ。國虎カ兵退テ新城穴内ノ要害ヲ保ツ。然ルニ安藝ノ家臣中、密ニ裏切リヲナス者アリ、沓ケ崎赤野ノ間道ヨリ、元親ガ軍ヲ導テ、不意ニ敵ノ後ニ出ツ。安藝ノ軍因テ大ニ敗レ、新城穴内モ亦陷ル。元親進テ安藝城ヲ圍ム、城中尚ホ固ク守テ下ラズ。時ニ横山某毒ヲ井ニ投セシカハ、城兵大ニ困ム。是ニ於テ國虎自殺シテ士卒ノ命ヲ助ケンコトヲ請フ、元親之ヲ許ス。國虎乃チ黒岩越前ヲシテ、室一條氏ヲ幡多ニ送リ、畑山内藏之丞兄弟ヲシテ、長子千壽丸ヲ奉シテ、魚梁瀬ニ走ラシメ、淨貞寺ニ自殺ス。家老有澤岩見之ニ殉死ス、實ニ永禄十二年八月十一日ナリ。後七日越前幡多ヨリ歸ル、元親之ヲ招ク、越前禮シテ之ヲ謝シ、國

矢流崩

虎ノ墓前ニ自殺ス。畑山兄弟、後歸テ畑山ニ居ル、元親欺テ之ヲ殺セシカハ、其家人三十六人、力戰シテ盡ク死ス。次テ有井、今ノ伊尾木安田、田野、奈半利ノ諸城皆降ル、元親乃チ香宗我部親泰國親ノ三男出テ、香宗我部氏ヲ繼ク者ヲ以テ安藝ノ城主トナス。

安藝氏ハ大臣蘇我赤兄ヨリ出ツ、壬申ノ亂赤兄土佐ニ流サレ、子孫安藝ニ居ル、文治ノ役太郎家村アリ、平教經ト相搏シテ海ニ投ス、國虎ニ至テ勢益々大ナリシガ、是ニ至テ遂ニ亡フ、

本山氏亡ブ

元龜二年紀元二千二百二十九年元親本山氏ヲ滅ス。是ヨリ先親茂本山ニ據リ、東、國見嶺（クニミタウゲ）、西、樫山（カシヤマ）ノ要害ヲ守リ、勢復タ振フ。元親謀ヲ設ケテ漸ク之ニ迫ル、本山氏遂ニ支フルコト能ハズ、退テ瓜生野（ウリフノ）ノ要害ヲ保ツ。元親又之ヲ攻メ落トセシカハ、親茂一門盡ク出テ降ル。後親茂近習ノタメニ毒殺サレタリト云フ本山岡豐ト兵ヲ搆フルコト十二年、是ニ至テ遂ニ亡ブ。

元親高岡郡ヲ徇フ

時ニ長宗我部氏一條氏ト睦シカラズ。弘岡ノ城主吉良親貞、元親ニ勸メテ一條氏ト絶タシメ、自ラ蓮池、戸波二城ヲ取ル。次テ元親自ラ高岡郡ヲ攻メ、佐川、城主中村越前逃走ス黑岩、城主片岡下總降ル波川、城主波川玄蕃降ル等ノ諸城ヲ下ス。津野ノ家臣等亦主人定勝ヲ逐ヒ、子勝興ヲ立テヽ降ル。元親進テ久禮城ヲ攻メ取リ、

土佐神社再興

城主佐竹義直ハ一條氏ノ家老ナリ密ニ欵ヲ通シ一戰シテ降ル

伊與木ノ諸城皆風ヲ望テ降ル。是ニ於テ東ハ奈仁井田郷ニ至ル、窪川、志和、半利ヨリ、西ハ幡多郡ノ界ニ至ルマデ、盡ク長宗我部氏ニ屬ス。

此年元親一宮村土佐神社ヲ再興ス。元親嘗テ兵亂ノ餘、神社ノ荒レ廢レタルヲ嘆キ、京都ヨリ大工檜皮師ヲ召シ寄セ、經營五年ニシテ成就ス、堂宇社殿頗ル立派ナリ。然ルニ一夜本社ノ天井ニ、一首ノ和歌ヲ書シテ、元親ノ武功ヲ讃スル者アリ。人々怪テ之ヲ讀ム、終ニ何人ノ業タルヲ知ラ

一條康政逐ハル

スト云フ。

其歌ニ曰ク、元親ハ永き弓矢の家と聞く再興まても一の宮哉、

天正二年紀元二千二百三十二年一條氏ノ家老等、其主中納言康政ヲ豐後ニ逐フ。是ヨリ先、康政放縱ニシテ、少シモ心ヲ政事ニ用ヒス、遊獵ニ託シテ、常ニ平田村ノ農家ニ居リシカバ、時ノ人稱シテ平田御所ト云ヘリ。家老土居宗三（ソウサン）屢々諫ムレドモ聽カス、一日意ヲ決シテ直諫ス、康政怒心頭ニ發シ、立トコロニ宗三ヲ手刃ス。是ヨリ放縱益々甚シカリケレバ、家老等元親ト議リ、迫テ政ヲ嫡子内政（ウチマサ）ニ傳

ヘシム。康政不平ニ勝ヘス、潛カニ家老等ヲ殺サンコトヲ謀ル。是ニ於テ家老等、遂ニ欺テ康政ヲ豐後ニ逐フ。康政豐後ニ往テ其室ノ父大友宗麟ニ依ル是ヨリ幡多郡大ニ亂レ、黨ヲ分テ互ニ相攻ム、内政幼ニシテ制スルコト能ハス。元親乃チ迎ヘテ大津ノ城ニ居ラシメ、大津御所ト云フ。吉良親貞ヲ以テ中村ノ城主トナシ、尋テ幡多郡全ク平定セリ。

天正三年一條康政、豐後ヨリ伊豫ニ來リ、御庄ノ城主御庄越前守等ヲ誘ヒ、幡多郡ニ攻メ入リ、宿毛城ヲ落トシ、進テ具同ノ栗本城ニ據リ、川ヲ控

渡川合戰

ヘテ陣ス。元親兵ヲ發シテ之ヲ討チ、大ニ渡川ニ戰フ。伊豫ノ軍遂ニ敗レテ本國ニ退ク、之ヲ渡川合戰ト云フ。

後元親一條氏ノ近習入江左近ヲ嗾シテ伊豫ニ入リ、密ニ康政ヲ刺殺サシメタリト云フ、

此年元親佐喜ノ濱一揆ノ長、大野源内ヲ討テ之ヲ滅ス。源内力飽クマデ强ク、威遠近ニ震フ。元親其久シク從ハザリシヲ怒リ、子女雞犬ニ至ルマデ、盡ク之ヲ殺ス。此時安藝郡ハ唯ダ野根、甲浦ノ二城ノミ、要害ヲ恃テ未ダ下ラズ、元親乃チ奈半利ノ城主桑名丹後ヲシテ、夜、野根城ヲ襲ハシム、

國内全ク平定ス

城主惟宗某阿波ニ敗走ス。甲浦城亦尋テ下リ、土佐一國全ク平定ス。

以上凡百餘年間ノ有様ヲ考フルニ、守護ノ令更ニ國中ニ行ハレス、武士各々城廓ヲ構ヘテ、日々ニ戰爭ヲ事トセシヨリ、長宗我部氏全國ヲ定ムルニ至ルマデ、人民ハ只ニ兵亂ノ久シキト、租稅ノ重キトニ困ミ、一日モ其業ニ安ンスルノ暇ナケレバ、農商工業ノ進歩セサリシモ、更ニ怪ムニ足ラス。

一條氏國ニ下ルニ及テ、京都ノ文學美術、之ト共ニ土佐ニ流レ來リ、中村御所ハ此時實ニ風雅ノ中心タリ。元親モ亦只ニ弓取ルバカリノ猛者ニアラズシテ、學問風流ノ心掛モアリケレバ、戰爭ノ暇ニハ、臣下ナド集メテ、讀書蹴鞠連歌等ノ催シヲナセリ。又學者ニハ南村梅軒僧忍性等ノ如キ有名ナル人モアリタリ。

第三章　長宗我部氏四國ヲ征スルヨリ其滅亡マデ

天正四年（紀元二千二百三十六年）元親已ニ土佐ヲ平ケ、進テ四國ヲ攻メントス。此時阿波ハ三好氏政ヲ失ヒ、國中大ニ亂ル。元親乃チ先ツ南阿波ニ入リ、諸城ヲ攻メ取ル。次テ大西ノ城主大西覺養（カクヤウ）出テ降リ、弟上野介ヲ送テ質トナス。大西ハ豐永鄕ヨリ、一筋ノ險路ヲ通ジ、阿讃、豫三國ノ境ニ近ク、最モ要害ノ地ナリ。元親城ヲ白地（シラヂ）ニ築キ、谷忠澄ヲシテ之ニ居ラシメ、四國ヲ討ツノ根城トナス。

元親軍ヲ阿波ニ出ス

元親織田氏ニ通ス

此年元親使ヲ京都ニ遣ハシ、明智光秀ニ依テ、好ヲ織田信長ニ通シ、嫡子彌三郎カ爲メニ、名字ヲ請フ。信長一字ヲ授ケテ信親ト稱セシメ、且ツ阿波ヲ領スヘキノ朱印ヲ與フ。次テ元親又使ヲ備前ノ浮田氏、安藝ノ毛利氏ニ通ズ。

天正八年波川玄蕃謀反ノ事覺ハレ、髮ヲ削テ阿波ニ奔リ、香宗我部親泰ニ依ル。初メ元親玄蕃ヲ以テ、幡多郡山地（ヤマヂ）ノ城番トナシ、既ニシテ之ヲ罷メシカハ、玄蕃怒テ遂ニ反ヲ謀ル。元親親泰ニ命シ、迫テ自殺セシム、波川ノ一族鎌田城ニ據リ、盡

土佐一條氏亡ブ

ク戰死ス。

天正九年元親一條内政ヲ伊豫ニ逐フ。亦波川玄蕃カ謀反ニ與ミセシコト、覺ハレシヲ以テナリ。内政法華津ニ至リ、未ダ數年ナラフシテ薨ス。文明二年教房土佐ニ下リシヨリ、六世百餘年ニシテ、土佐一條氏亡ブ。

是ヨリ先、元親既ニ阿波ノ七郡ヲ取リ、三好存保ヲ讃岐ニ走ラス、紀州湊雜賀ノ兵モ亦質ヲ送テ款ヲ通ズ。是ニ於テ信長、元親ニ令シテ曰ク、土佐一國ト阿波ノ二郡ハ、之ヲ領スルヲ許スモ、其他

元親織田氏ト絶ツ

信長ノ四國征伐

ハ妄リニ兵ヲ加フルコトヲ得スト。元親笑テ曰ク、我レ我ガ兵ヲ以テ自ラ四國ヲ取ル、何ソ他人ノ差圖ヲ受ケント、是ヨリ遂ニ織田氏ト絶ツ。因テ諸城ヲ繕ヒ要害ヲ固メ、大西ニ陣シテ信長ノ軍ヲ待ツ。天正十年信長、子信孝ヲ以テ、四國征討使トナシ、三好笑岩（シヤウガン）ヲ以テ先鋒トナス、笑岩先ツ阿波ニ入テ數城ヲ取ル。時ニ忽チ光秀、信長ヲ弑セリトノ報アリシカハ、四國征討ノ軍、何カハ溜ルヘキ、周章京都ニ引揚ケタリ。

光秀ノ信長ヲ弑スルヤ、元親嘗テ之ト潛約スル所アリタリトノ説アリ、此後元親屢々使ヲ德川家康及ヒ信雄信孝等ニ

通シ秀吉ヲ夾撃セントコトヲ謀リ、既ニ其期ヲ約セシコトアルニ至ル、將軍足利義昭モ亦書ヲ元親ニ寄セテ、入京ヲ謀リシコトアリ、

元親阿波ヲ定ム

元親京都ノ亂ニ乘シテ、阿波讃岐ヲ定メント欲ス。先ツ香川親和ヲシテ讃岐ヲ討タシメ、次テ自ラ大軍ヲ率ヰテ阿波ニ討チ入リ、大ニ三好存保ヲ中冨川（ナカトミ）ニ破ル、存保自殺セントセシヲ其臣之ヲ止メ、退テ勝瑞（シヤウズイ）ヲ保ツ。元親又進テ之ヲ攻メ落トセシカハ、存保讃岐ニ敗北シ、阿波全ク平定ス。元親、香宗我部親泰ヲ以テ阿波ノ軍代トナシ、進テ讃岐ニ入ル。

元親讃岐ヲ定ム

中冨川ノ劇戰兩軍死傷尤モ多シ、時ニ矢野又六郎ナル者三好氏ノ軍ニ屬シテ戰死ス、是レ安藝國虎ノ子千壽丸ナリトト云フ、

天正十一年三好存保讃岐ノ虎丸城ニ在リ、援ヲ秀吉ニ請ヒシカハ、秀吉仙石秀久ヲ遣テ之ヲ救フ。元親秀久ト引田（ヒケタ）ノ浦ニ戰テ、又之ヲ擊チ破リ、火ヲ民舍ニ放ツ、秀久退テ淡路ニ入ル。明年元親進テ虎丸城ヲ攻メ、存保城ヲ棄テ、京都ニ退ク、是ニ於テ讃岐全國盡ク平定ス。

元親始メテ軍ヲ讃岐ニ出セシ時、雲遊寺山ニ登テ國ノ形勢ヲ望ム、寺僧元親ニ謂テ曰ク、君ノ寡兵ヲ以テ讃岐ヲ取ラントスルハ猶ホ罐子ノ蓋ヲ以テ水桶ヲ覆ハントスルカ如シト、元親笑テ曰ク、余ガ罐子ノ蓋ハ大小適合自在ナリ、

元親四國ヲ定ム

天正十三年久武親直伊豫ノ諸郡ヲ定ム、道後ノ城主河野通昌欵ヲ通シ、家老ヲ送テ質トナス。松山ノ城主、宇都宮元綱城ヲ棄テ、走リ、毛利氏ニ依ル、獨リ得能、來島海島ニ據テ下ラス、天正四年元親始メテ軍ヲ阿波ニ出セシヨリ、是ニ至テ十年、遂ニ四國ヲ定ム。

秀吉ノ四國征伐

此年秀吉弟秀長、三好秀次、浮田秀家、小早川隆景等ヲ遣ハシ、途ヲ別テ四國ヲ征伐ス。秀長等先ツ根城ヲ阿波ノ土佐泊ニ築キ、諸城ヲ攻メテ頗リニ之ヲ落トシ、進テ一ノ宮城ヲ攻ム、城兵固ク守テ

元親秀吉ニ降ル

下ラス。秀長乃チ城將谷忠澄ヲ招テ、和ヲ議セシム、忠澄白地ニ至テ秀長ノ意ヲ傳フ、元親怒テ散々ニ之ヲ罵ル。去レド老臣等皆元親ヲ諫メシカハ、元親遂ニ意ヲ決シテ、豐臣氏ニ降リ、三男津野親忠ヲ送テ質トナス。秀吉乃チ土佐一國ヲ元親ニ賜ヒ、阿波ヲ蜂須賀家政ニ、讃岐ヲ仙石秀久ニ、伊豫ヲ小早川隆景ニ與フ。應仁以來戰爭止ムノ日ナク、人民兵亂ニ困ムコト凡百二十年、是ニ至テ亂始メテ平ギ、人々安堵ノ思ヲナセリ。

天正十四年島津氏犬友氏ヲ討ツ、元親父子仙石

秀久ト、大友氏ノ援兵トシテ、豊後ノ戸次川ニ至ル。秀久元親ノ諫ヲ用ヒス、敵ノ伏兵ニ陷テ大ニ敗レ、信親奮戰シテ遂ニ死ス、年二十二。谷、吉良、本山、片岡等ノ諸將、及ヒ士卒七百人亦戰死ス。

信親戰死

元親二十餘騎ト逃レテ上原城ニ入リ、次テ伊豫ニ退キ、谷忠澄ヲ遣ハシ新納武藏守ニ因テ信親ノ遺骸ヲ請ヒ受ケ、明年之ヲ高野山ニ葬リ戰死者七百餘人ノ爲メニ、碑ヲ立テ以テ其功ヲ勒ス

居城移轉

天正十六年元親岡豊ヲ去テ大高坂ニ移ル。此地東ハ國澤ノ原野ニ接スルモ、大河城ノ前後ヲ流レ、北ニ洞ケ島ノ淵アリ、東ニ太布ケ淵、籠ケ淵等アリテ、境内狹ク邸宅ヲ置クニ便ナラズ。因テ沼

檢地

ヲ埋メ堤ヲ築キ、僅カニ市街ヲナス。然レドモ河水屢々溢レテ、士民安堵スルコトヲ得ス、故ヲ以テ僅カニ三年ニシテ又浦戸ニ移ル。

是ヨリ先、秀吉天下ニ令シテ、田地ヲ丈量セシム。元親因テ國中ノ田地ヲ檢シ、天正十五年秋ヨリ、同十八年春ニ至テ終ル。地檢帖凡テ三百五十卷、今尚ホ存セリ。

時ニ籠宗全ト云フ者アリ、弘岡村ニ住ス、其檢地ノ法最モ苛酷ナリシカバ、村民火ヲ其家ニ放テ之ヲ焚殺セリト云フ、

文禄元年紀元二千二百五十二年秀吉朝鮮ヲ征ス、元親諸將ト韓ニ入リ、諸道ニ戰フ。慶州ヲ攻メシ時、吉田市左

衛門、敵ノ大將朴好仁ヲ擒ニス。朝鮮ノ役再ヒ起ルニ及テ、元親盛親國中ニ課シテ、大船數艘ヲ造ラシメ、再ヒ韓ニ入ル。前後擒ニスル所ノ韓人三百八十餘人、地ヲ限テ住居セシメ、之ヲ唐人町ト云フ、專ラ豆腐ヲ製シテ生業トナス。好仁ノ子孫秋月氏ト稱シ、今現ニ唐人町ニ住スト云フ。

又經東ト云フ者アリ醫ヲ能クス、後召サレテ伏見ニ至リ、人ノタメニ毒殺セラレタリト云フ

唐人町

慶長元年紀元二千二百五十六年元親吉良親實等ヲ殺ス元親吉良親實、比江山親興ヲシテ自殺セシメ、兵ヲ發シテ盡ク其黨類ヲ殺ス。親實ノ家臣、勝賀野次郎兵衛、一宮ノ神官永吉飛驒等奮鬪シテ死ス。親興ノ妻子須江ノ正福寺ニ匿ル、元親兵士ヲ遣ハシ、捕ヘテ須江磧ニ殺ス、寺僧怒テ亦自殺ス。

是ヨリ先久武親直寵ヲ恃テ驕侈ナリ、又費殿川村木流シノ事ヨリ深ク親實ヲ怨ム、元親嘗テ諸臣ヲ會シテ繼嗣ヲ議セシ時、親直盛親ヲ立テ信親ノ女ヲ以テ之ニ配シ、已レ威福ヲ擅ニセントス、諸臣敢テ難スル者ナシ、獨リ親實親興固ク執テ不可トナシ、津野親忠ヲ立テンコトヲ議ス、元親懌ハス、親直因テ讒ヲ搆ヘテ遂ニ是ニ及フト云フ、後親實等ノ鬼祟リヲナス、世人七人御崎ト稱シテ大ニ之ヲ怖ル、元親乃チ祠ヲ吾川郡木塚山上ニ立テ、親實ノ靈ヲ祭ル、木塚明神是ナリ、

慶長二年元親掟百ケ條ヲ制定シ、奉行庄屋ヲ置キ、喧嘩口論大酒等ヲ禁シ、賣買、貸借、道路往來、諸職人賃銀等ノ事ヲ定メ、諸運上ハ從前ノ如ク十

掟百ケ條

分一トナス。

七郡ノ内奉行三人ヲ置キ、在々所々ニ庄屋ヲ置ク、許可ヲ得スシテ他國ニ出ツルコト、及ビ馬ヲ他國ニ賣ルヲ禁ス、職人ノ賃銀ヲ定メテ、上手ハ粍七升中ハ五升下手ハ三升トナシ、落書ヲナス者ハ死刑ニ處シ、竹ノ子ヲ折ル者亦一貫文ノ過料ニ處セラル、

慶長四年元親津野親忠ヲ岩村ニ幽シ、舊臣ヲシテ相通ズル勿ラシム。親忠憤々ニ勝ヘス、密ニ京都ニ逃レントセシモ、或人之ヲ諫メテ止ム。後關ケ原ノ役終リ、盛親國ニ歸リシ時、遂ニ迫テ吉祥寺ニ自殺セシム。家康之ヲ聞テ、大ニ盛親ヲ憎ミシト云フ。

元親卒ス

長宗我部元親之像

此年從四位下少將土佐守長宗我部元親、伏見ノ邸ニ卒ス、年六十一、雪蹊恕三（セツケイジョサン）ト謚ス。遺命ニ依リ、京都天龍寺ニ火葬シ、遺骨ヲ長濱村天甫寺山（テンポジザン）ニ葬ル。

後盛親長濱村慶雲寺ヲ以テ元親ノ菩提寺トナシ、位牌ヲ立テ木像ヲ安置シ、寺號ヲ雪蹊寺ト改ム、

慶長五年石田三成等、兵ヲ擧テ德川家康ヲ討ツ。盛親諸老臣ト議ヲ定メテ、德川氏ニ應セント欲シ、使ヲ關東ニ遣ハシ、其意ヲ通セシム。使者近江ニ至リ、途塞リテ達セス、盛親遂ニ意ヲ決シテ西軍ニ屬ス。關ケ原ノ役、南宮山ノ南ニ陣ス。西軍敗ルルニ及テ、家康遂ニ盛親ノ領國ヲ没收シ、京都柳ケ辻ニ置キ、土佐ヲ以テ井伊直政ニ預ケ、既ニシテ我ガ山内氏ニ賜フ。是ニ於テ井伊氏ノ家臣鈴木重好、松井武太夫等、山内修理亮ト共ニ、城受ケ取リノ爲メ土佐ニ下

盛親西軍ニ屬ス

ル。時ニ一領具足（小身ノ侍ニシテ他家ノ御馬廻リ格程ノモノナリシト云フ）ノ輩、一揆ヲ起シテ、浦戸城ヲ乘ツ取リ、鳥銃ヲ發シテ之ヲ拒キシカハ、舩岸ニ近ツクコトヲ得ス。家老等大ニ之ヲ憂ヒ、辛フシテ鈴木等ノ一行ヲ雪蹊寺ニ入ラシム。一揆等又寺ヲ圍ミ、土佐ノ半ヲ以テ、盛親ニ與ヘンコトヲ迫ル、往復五十日ニ及ヒ、幕府遂ニ近國諸候ニ命シテ、之ヲ討タントスルノ議アリ。既ニシテ家老桑名彌次兵衛等、謀ヲ以テ城ヲ奪ヒ、一揆ヲ糠塚（ヌカツカ）ニ擊テ之ヲ破リ、巨魁數百人ヲ斬ル。殘黨四方ニ散シ、事遂ニ平クヲ得タリ。

浦戸一揆

山内氏乃チ先ツ國中ニ令シテ、士民ヲ安堵セシメ、明年正月土佐ニ入國ス。

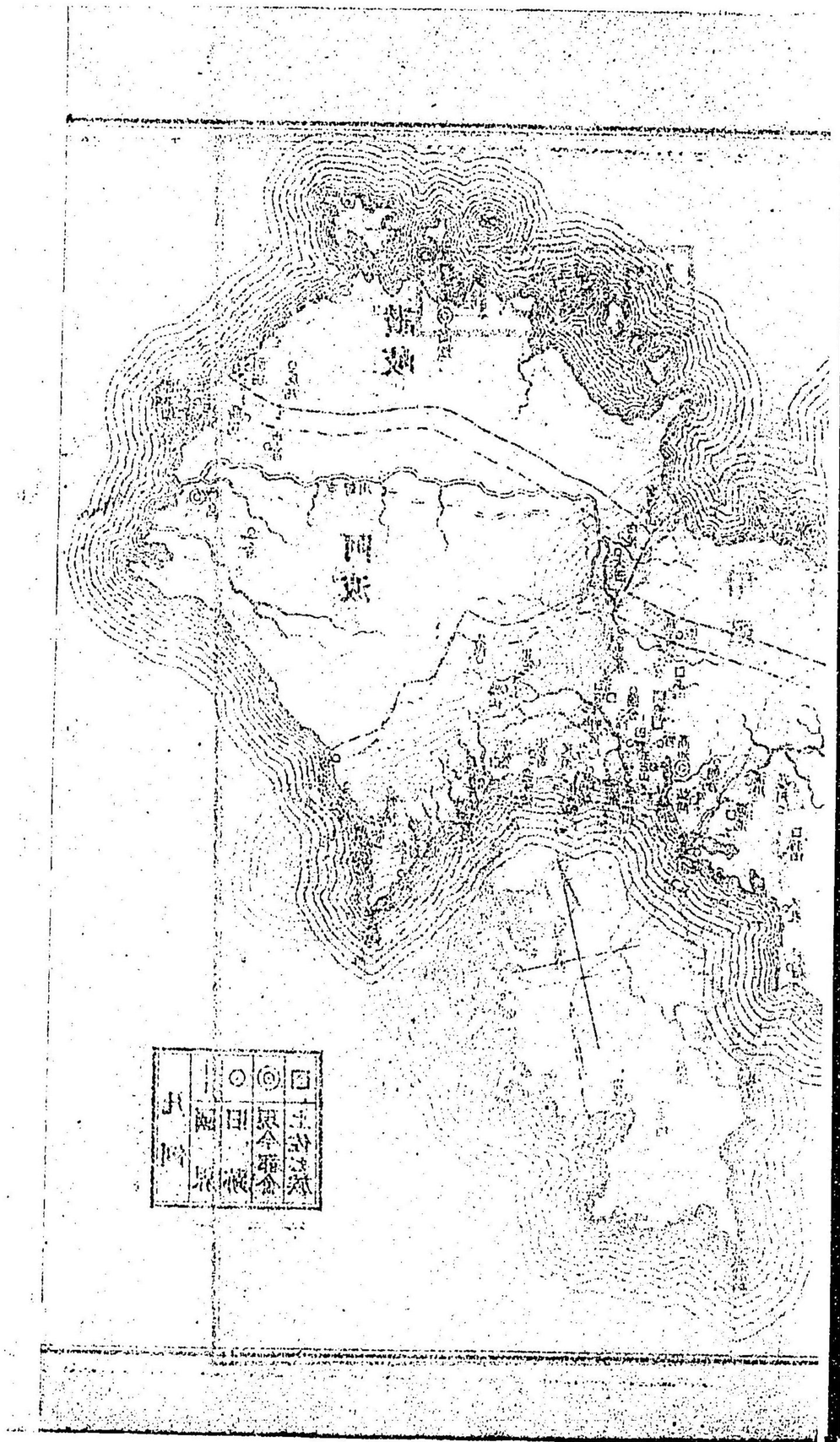
慶長十九年大坂ノ役起ル、盛親京都ヨリ潛カニ行テ之ニ應ス。大坂城陷ルニ及テ、蜂須賀氏ノ家臣長坂某ノ捕フル所トナリ、六條磧ニ斬ラル、年四十

長宗我部氏亡ブ

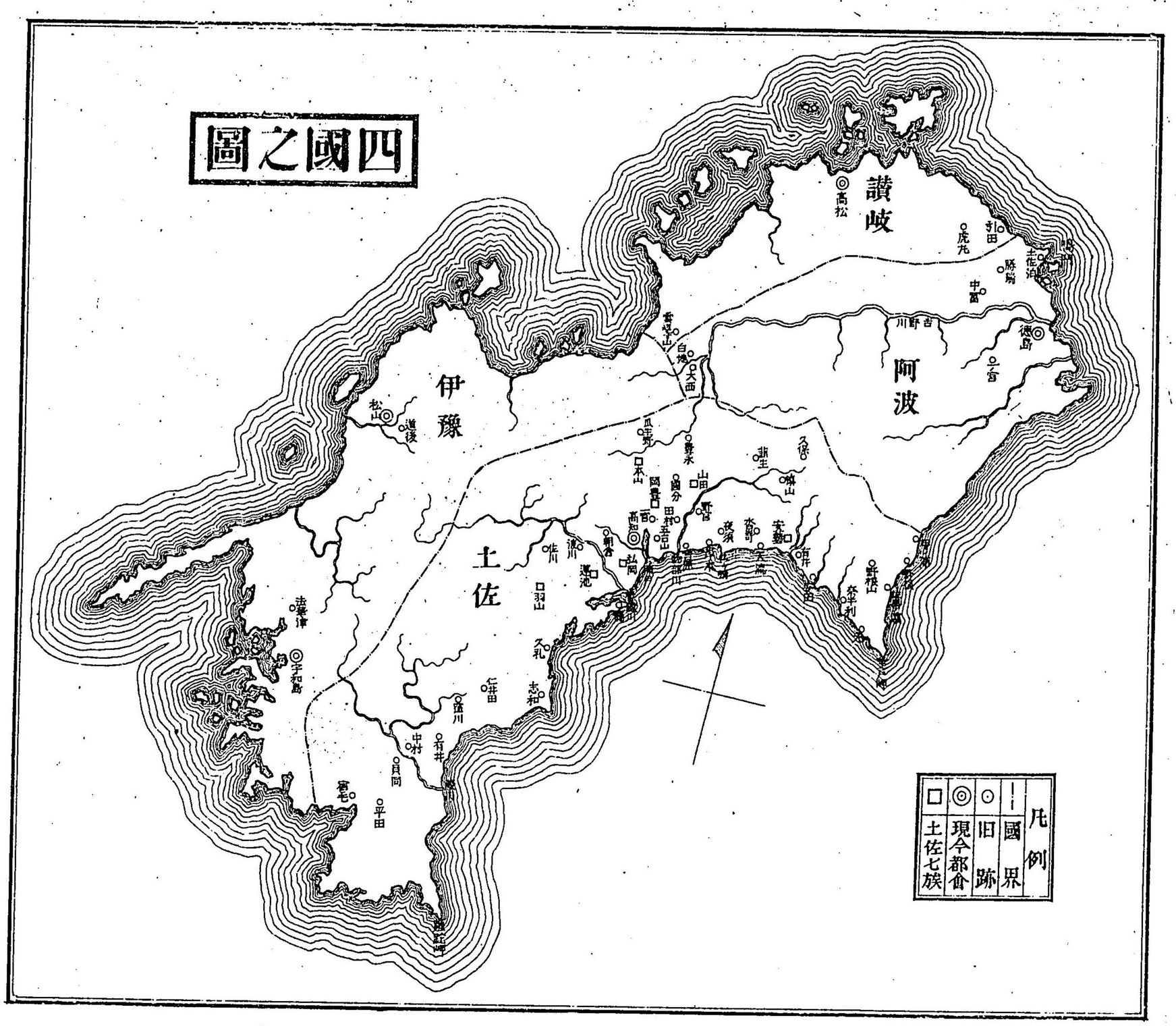
一、時ニ元和元年五月十五日ナリ。弟右近亦死ヲ伏見ニ賜フ。初メ秦能俊（ハダヨシトシ）、長岡郡岡豐ヲ領シ、長宗我部氏ト稱セシヨリ二十二世是ニ至テ遂ニ亡ブ。

盛親ノ斬ニ處セラルヽヤ、五條蓮光寺ノ僧之ト舊アリ、其屍ヲ請フテ寺内ニ葬リ、源翁宗本ト謚ス、

小學校用　土佐史要巻之上　終



四國之圖



明治廿六年一月五日印刷
同　廿六年一月廿日出版

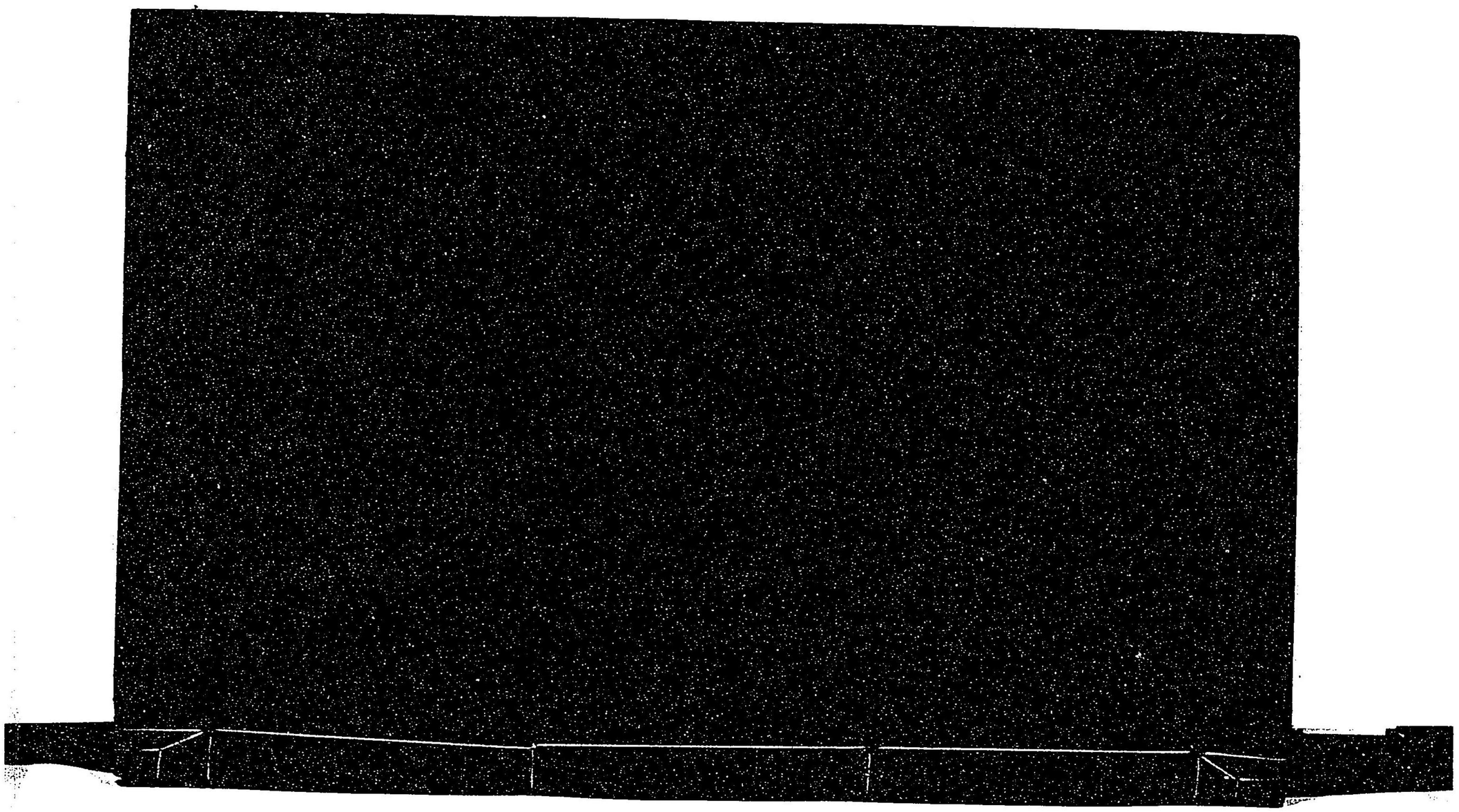
定價金弐錢

著述兼發行者　高知縣土佐郡江ノ口村大川筋拾七番邸　青木義正

印刷兼發賣人　高知縣高知市本町筋三十六番屋敷　村岡榮助

發兌書肆　高知市種崎町　澤本駒吉

仝　高知市境町　山中專助

仝　高知市本町壹丁目　小川代次

仝　大阪市東區備後町四丁目　吉岡平助